

# 造成漁場効果調査 (要約)

吉田 雅範・藤川 義一

沿岸漁場整備開発事業によって造成された漁場のうち、地先型増殖場について造成後の状況を把握し、漁場管理方途を検討することを目的に調査を行った。平成8年度には階上町追越地区のウニ増殖場、三厩村椛榔地区のアワビ増殖場について調査すると共に、尻屋沿岸の磯根資源の状況を調べた。なお、詳細については「地先型増殖場効果調査（階上町追越地区・ウニ）報告書」（平成9年3月）、「平成8年度三厩村竜飛地先磯根資源調査報告書」（平成9年3月）及び「平成8年度尻屋地先磯根資源調査結果報告書」（平成9年1月）として報告した。

## 1 追越地区地先型増殖場（ウニ）調査結果

平成8年12月及び平成9年3月に増殖場内及びその周辺の13地点について、底生生物を枠取り採取（海藻50cm×50cm 2枠、動物1m×1m 2枠）した。更に増殖場内の第1工区については、設定範囲（40m×1m 4本）に生息するキタムラサキウニの計数を行った。

キタムラサキウニの計数結果から第1工区に生息するキタムラサキウニは10万～14万個体（12～15個体/m<sup>2</sup>）と推測された。第1工区の花藻生育密度は高い値を示したものの、キタムラサキウニの高い生息密度を考慮すると、今後海藻が減少する可能性があり、餌料の添加、キタムラサキウニの間引き等の対策が必要になると考えられた。

## 2 椛榔地区地先型増殖場（アワビ）調査結果

平成8年6月に増殖場内7地点について、底生生物を枠取り採取（海藻50cm×50cm 2枠、動物1m×1m 2枠）した。

マコンブは東側出口付近に高密度に生育しており、生育密度は18kg/m<sup>2</sup>（420個体/m<sup>2</sup>）であった。エゾアワビは3地点から合計8個体採取された。植食性巻貝であるオオコシダカガンガラが生息密度は1.5～8.5個体/m<sup>2</sup>（14～56g/m<sup>2</sup>）であり、バフンウニの生息密度は最も高い地点で14.5個体/m<sup>2</sup>（63.2g/m<sup>2</sup>）であった。

増殖場内の海藻の生育密度は高いものの、植食性動物が広範囲に生息しており、将来エゾアワビの餌料が不足する可能性がある。従って、東側出口付近に高密度に生息するマコンブを増殖場内に分散したり、植食性動物を駆除したりすることが必要になってくると考えられた。

## 3 尻屋地先磯根資源調査結果

平成8年6月に尻屋地先の水深2.5, 5, 10, 15, 20mにある計65地点について、底生生物を枠取り採取（海藻50cm×50cm 1枠、動物1m×1m 3枠）した。

エゾアワビが採取された地点は6地点のみであり、稚貝は認められなかった。尻屋地先でのエゾアワビの発生は依然として低い状況と考えられた。キタムラサキウニは47地点から採取され平均生息密度は2.0個体/m<sup>2</sup>と平年並みであった。漁獲量に比べ十分な資源量があると考えられた。マコンブは1年目マコンブが過去10年間で最も多く採取され、水深2.5m, 10mの生育密度は各々129.3, 222.0個体/m<sup>2</sup>であった。平成9年にはマコンブは豊漁と推測された。